通詞・堀達之助

嘉永六年六月三日、浦賀沖へ来航したペリー提督が率いるアメリカ東インド艦隊に最初に接触したのは、浦賀奉行所与力・中島三郎助と通詞の堀達之助であったことはよく知られている。ペリーはアメリカ軍艦へ日本人が乗艦することをかたくなに拒否していたが、中島と堀に乗艦を許可した背景には、堀が発した「Ｉ　ｃａｎ　ｓｐｅａｋ　Ｄｕｔｃｈ」と英語で呼びかけたことで、英語をしゃべる日本人がいることに少し驚き、交渉を始めるきっかけになった。

堀は文政六（一八二三）年、長崎通詞・中山作三郎武徳の五男として生まれた。幼少時は建之助といった。四歳のころから義兄の西吉兵衛にオランダ語を学び、天保四（一八三三）年には稽古通詞手代、六年には稽古通詞となっている。稽古通詞とは通詞見習いのことであり、稽古通詞になると多少は手当がもらえたが、堀の手当の支給額は他と比べると少し高い。天保十（一八三九）年に堀フサと結婚、翌年には小通詞末席へと昇格している。結婚と「堀」の姓を名乗るまでには、少し時間がある。

十九世紀に入ると、異国船が江戸湾沿岸で頻繁に目撃されるようになり、事実文政元年（一八一八）には浦賀沖へイギリスが来航した。この時、江戸の天文方から通詞が浦賀へ到着するまでに数日かかっている。特に天保十三（一八四二）年に異国船対策が「無二念打払い令」をやめ「薪水給与令」にしてからは、江戸湾警備を増強した。その対応策の一環であろうか、天保十四年から長崎通詞の浦賀常駐が言い渡された。長崎通詞の常駐によって、異国船が来ない間に通詞から聞く西洋事情が、この後の異国船来航対策にどれほど役に立ったことであろうか。

堀は弘化二（一八四五）年に浦賀詰めを言い渡され、翌年閏五月のビッドル来航の際には、ビッドル側から示された英文を和訳しており、また、和文英訳も行っている。この英文和訳・和文英訳は、日本人が英語との関わりのもっとも古いものとされている。

さらにいえば、ビッドル来航は、通詞・堀達之助が歴史史料に現れた最初の出来事でもあった。

では堀はどこで英語を習ったのであろうか。長崎ではアメリカ人マクドナルドから英語を教えてもらった通詞が多く、堀も数多くの本ではマクドナルドに習ったと伝えられていたが、堀のご子孫である堀孝彦氏が著した『英学と堀達之助』や『開国と英和辞書』で、マクドナルドからの教えを受けたのでなく、独学であろうことがわかってきた。

堀と浦賀のつながりはビッドル来航時が最初で、次は嘉永元（一八四八）年に浦賀奉行の戸田氏栄と浅野長祚が連名で、堀の浦賀常駐の延期願いが出されている。この願いは却下されてしまったが、翌年には浦賀へ戻ってきた堀は、幕府の書庫にあった『野戦砲術書』の原本を借り受け、これを翻訳し、浦賀奉行・浅野長祚が序を書き、中島三郎助と香山栄左衛門が校訂をして『大砲使用説』という本に仕上がっている。この本があまり知られていなかったのは、翻訳者の名が堀徳政となっていたので、見過ごされたようである。

さらに興味深いのは、この本の関係者で、ペリー来航に対応していることである。

こうした連携があったからこそ「偽副奉行」や「偽奉行」発言が飛び出しても、対応ができたのであろう。こうしてみるとペリー来航は浦賀奉行所としても絶好のスタッフの時であったといえよう。（了）